



MONGOLIA

学校名: 千葉市立幕張東小学校

氏名: 窪田 尚美

[担当教科: 小学校全科]

● 実践教科等: 総合的な学習の時間、道徳

● 時間数 : 6時間

● 対象生徒 : 第5学年

● 対象人数 : 33人

1 単元名

世界の人々とともに生きる

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・世界の多様な文化・生活を知り、類似点・相違点に気付き、外国への興味を持つ。
(進んで参加する態度)
- ・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気付き、互いに助け合う心を培う。
(つながりを尊重する態度)
- ・世界が抱える問題について知り、豊かな人間関係をつくるための行動目標を自己決定できる。
(自己の生き方の追究)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1) 教材観

本単元は、モンゴルの国々の習慣や文化を知ること、その違いに気付き異文化を認めると共に自国文化についても誇りを持ち、世界各国の人々と共生していこうとする態度を養うことをねらいとしている。

「総合的な学習の時間」では、モンゴルの人たちの生活や文化を紹介する。住居や遊びを体験することで、日本との文化の共通点と相違点について追及していく。そして、「道徳」では、外国の人々や文化を大切にする心をもつことに重点を置く。国際化への対応が必要となってきた社会の中で、目先の情報で外国を考えるのではなく、世界の人々が置かれている状況の違いに気付き、今の自分をみつめ、世界の人々と積極的に関わっていこうとする気持ちをもつことと捉える。外国の人々がそれぞれの国の伝統と文化を大切に生きていることを捉え、尊重する気持ちをもてるようにしたい。

本単元を通して、児童がモンゴルという国の現状を知ること、違いを知り、理解し合うことや受け入れることのよさについて考えるのに適している。自分の周りにはさまざまな立場の人がいることに気付くようにし、お互いが理解し合うにはどんなことが必要か、学習をしながら考えるようにする。指導にあたっては、モンゴルの学習を進めていく中で、共通点や相違点について「聴き合い」をして考えさせていく。最終的に、世界とつながるために、何ができるのか、自分の思いを深めさせたい。

(2) 児童生徒観

本学級の児童は、4月より外国語活動及び総合的な学習の時間の「神田外大学との交流」の学習が始まり、世界の国々に興味を持ち始めたところである。ALT や神田外語大学の留学生との交流をしている中で、日本と世界の遊びの違いや、考え方の違いに気付き、世界のことを意欲的

に学ぼうとしている様子が見られる。一方で、昨今の多くの事件をテレビ等のメディアを通して知り、外国は危ない国だから関わろうとしない児童もいる。

また、言葉や文化の違いを理解することが苦手であったり、自分の国の伝統と文化に対する理解も希薄であったりするようである。

9月に行ったアンケートでは、「外国の人と進んで交流しようとしている」の項目で約8割の児童が「あてはまる」と回答し、「あまりあてはまらない」と回答した児童は2割で、外国の人と交流したいと思っている児童が多いことがわかる。しかし、外国の人と積極的に話したり、交流したりしたいと思っているが、自分から進んで外国の人に関わろうと考える児童は少ない。

そこで本単元では、モンゴルの文化について関心を持ち、積極的に外国の人と接したり、交流したりすることのよさに気付かせたい。最終的に、児童が外国を知りたいな、行ってみたいなという前向きな気持ちが持てるようにしたい。

(3) 指導観

- 資料の提示を工夫し、世界の現実に迫ることができるようにする

導入段階でモンゴルの子どもたちの写真を提示し、何をしているところか、自分の生活と違うところはどこかを考えるようにする。写真を用いることで、モンゴルの状況や問題を身近に、分かりやすく捉えることができるようにする。そして、自分がどれほど恵まれた環境に暮らしているのかに気付かせる。

- 「聴き合い」を通し、世界の中の一人として考えられるようにする

「聴き合い」をすることによって、自分だけでは気付かなかったことや感じていなかったことに気づき、より相互理解が深まると考える。そのことで児童は、身近にできることがたくさんあることに気付くようにしていく。子ども同士が「聴き合い」をしていく中で、JICA の取り組みや活躍する人の願いによって、「援助を行うこと」が解決につながると考えるだろう。その場合は、「一回の援助で貧困や飢餓は解決するのだろうか」や「現実には、なぜ簡単に援助が起らないのだろうか」と問い返しをすることで、援助だけが最適な解決策ではないことを知るようにしたい。そして、自分の考えを発表する場、友達の考えを聞く場を設け、より自分の考えを深めるようにしていきたい。

- 外国語活動や総合的な学習の時間の中で、世界の人と積極的に関わっていこうとする気持ちを育てる

事前の総合的な学習の時間の「We are the world」の単元では、世界の国々へ興味・関心を持たせたい。そして、外国の文化があることのよさに気付かせ、興味を持てるようにしたい。

事後の総合的な学習の時間「世界の人々とともに生きる」では、世界が抱える問題に着目し、それぞれの違いを知ることの大切さと相手の立場になって考えることの大切さに気づき、自分ができることを考え、行動できるような心を育てたい。

5 評価基準

観点	課題設定の力	課題解決の力	表現する力	生き方を見つめ直す力
評価規準	世界の多様な文化・生活について興味・関心を持って取り組む。	世界の現状を知り、自分にできることを考える。	モンゴルと日本の共通点・相違点を見つける。	モンゴルや国際社会における様々な課題について理解し、国際協力のよさに気づくことができる。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

1	モンゴルゲルはどんなつくりかな？ 〈総合的な学習の時間〉	・ゲルを見学し、モンゴルの文化について触れ、興味・関心を持つ。	・ゲルの外部と内部を見学して、造りを知る。 ・移動しやすいようなテントの造りだと知る。
2	モンゴルと日本は似ている？似ていない？ 〈総合的な学習の時間〉	・モンゴルの人々や生活について知り、モンゴルをより身近に感じる。	・モンゴルの国の概要を学ぶ。(ゲル・遊牧民) ・日本と共通点が多い写真を見て、モンゴルか日本か分ける。 ・日本と似ているところが多いことに気が付く。
3	モンゴルの子供の様子について知ろう 〈総合的な学習の時間〉	・モンゴルの写真や遊びを通して、モンゴルと日本のつながりを知る。	・モンゴルのじゃんけんを知る。 ・モンゴルの学校や生活の様子を見て、フォトランゲージを行う。 ・「なぜ、日本語を勉強したい人が多いの？」「なぜ、日本人が好きな人が多いの？」という問いに対し、予想する。
4	わたしたちにできること 〈道徳〉	・モンゴルの学校について知る。日本が行っている支援活動について知る。	・子どもの写真を見る ・日本とモンゴルを比較し、子どもの願いをまとめる。 ・国際協力として『国際協力機構』の支援があることを知る。 ・『青年海外協力隊』の経験談を聞く。 ・自分にできることを考える。
5	世界で働く日本人の活動を知ろう 〈道徳〉	・JICAのボランティア活動について知り、日本が行っている国際協力について考える。	・モンゴルで働く日本人のインタビューを見て、話し合う。 ・千葉に住む協力隊の人のインタビューを聞き、支援に対する熱い思いを知る。 ・日本の支援によって親日的な国であることを知る。
6	モンゴル人の回答について疑問に思ふ点をトウシーさんに尋ねてみよう。 〈総合的な学習の時間〉	・日本で活躍するモンゴル人と出会い、モンゴルと日本はつながっていることに気付く。	・質問点を明確にし、トウシーさんにインタビューする。 ・日本に対する思い、モンゴルに対する思いを知る。 ・日本でモンゴル人が努力することが、どのような成果を導いているのか考える。
7	モンゴルの小学生にお手紙を書こう 〈総合的な学習の時間〉	・世界の人々と積極的に関わっていこうとする心情を育てる。	・世界の人のために自分ができることを考える。 ・モンゴルに住む小学生にお手紙を書いて、学習してきたことをまとめる。

7 授業事例の紹介

小単元名【わたしたちにできること(国際理解・親善と人類愛)】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月2日(金)第3限

(イ)実施会場 5年2組教室

(ウ)本時の目標

○モンゴルの様子と自分の置かれている立場を知り、自分にできることを考える。

○多様な習慣や文化、価値観の違いに気付き、異文化を理解しようとしている。

(エ)指導のポイント

・モンゴルの写真をもとに、モンゴルの子どもの願いに目を向ける。国際協力の一つとして「JICA」で働く人がいることを知り、友達と「聴き合い」をしながら自分は何ができるのか考える。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
-------	------	------	------	---------	-------------------

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

導入 5分	モンゴルの写真を見て、「欲しいことは何でしょう」と児童に問う。【1】	1 写真を見て、何をしているか考える。	一 斉	・厳しい現状で苦しんでいる子供たちの写真を見て、自分達との違いを考え、本時のねらいとする価値への方向付けをする。	
展開 30分	資料を読み、モンゴルの学校の違いや気付いた所について話し合う。【4】 「モンゴルの小学生の願いは何だろう」「みんなとの違いは何だろう」と児童に問う。【1】 JICAのモンゴル支援について紹介する。【5】	2 資料『モンゴルの小学生の生活・学校の様子』を聞き、話し合う。 3 モンゴルと日本を比べて、考える。 4 国際協力の一つとしてJICAの取り組みを知る。JICAの方から話を聞く。	一 斉 一 斉 一 斉	・写真を提示しながら読み聞かせをすることにより、モンゴルの小学生を身近に感じられるようにする。 ・ワークシートに自分の意見や考えを書くことで、モンゴルの小学生の思いを十分に考えさせたり、整理させたりするようにする。 ・「支援をする」ことに気付かせることで、国際協力をしている人や団体に目を向けるようにする。 ・JICAで働いている人の経験談を聞き、関心を持てるようにする。	
	「世界とともに生きる人としてどんなことをしたいと思いますか。」の問いに対して自分で考え、グループで聴き合いをする。【3】	5 小グループに分かれて、聴き合いをしながら話し合う。	班	・小グループで聴き合うことで、自分と異なる考えや思いにも触れることで、大切なことに気付くようにする。 ・明確な答えがあるわけではなくモンゴルの学校の実情を知った上で相手のことを理解しようとするのが大切だということに気付かせる。	・モンゴルの教育事情について関心を持ち自分のできることについて考えようとしている。 (学習の様子・ワークシート)
まとめ 10分	本時の学習をまとめ、次時の学習の予告をする。【6】	6 本時の学習の振り返りをする。	個人	・熊本大地震の時に、モンゴルから支援があったことに触れることで、お互いに知ろうとすることが大切だと考えるようにする。 ・次時では、モンゴルの支援をしている日本人を紹介することを知らせ、意欲を高める。	

(2) 授業の振り返り

【成果】

- ・児童と同じような年齢の子供のインタビューを資料にすることで、身近に考えることができた。
- ・国際協力の一つとして「JICA」の協力隊のお話を聞くことができたことにより、興味・関心を持って

意欲的に学習に取り組むことができた。本単元の流れは、子供の学びに合っていた。

- ・友達の考えを「聴き合い」することにより、世界の一員として自分にできることを深めて考えることができた。

【課題とその具体策】

- ・子供たちがより深く考えるためには、今後、モンゴル等支援を必要としている国への仕方がいろいろあることを知らせていく必要がある。
- ・JICA の資金は、日本の税金から出資していることを伝え、子供たちも国際協力に参加していることをおさえるとよい。

(3) 使用教材

○モンゴルの子供たちの写真



○モンゴルの小学生の作文(インタビューをもとに作成)

わたしはモンゴル人のノミンダリ、10歳です。わたしの家族は、ウランバートル市の近くに住んでいます。学校の先生が言っていたけれど、地方からウランバートル市に移り住む人がとても多く、わたしの学校は、全校で1000人、26学級あります。教室の数が足りないので、午前と午後で13学級ずつ交換する2部制をとっています。机や椅子は、みんなで使うので誰のものでもありません。

わたしは、算数とモンゴル語(国語)、体育の授業が好きです。校外学習や雪まつりも大好きです。学校は、とても楽しくて帰りたくないくらいです。休みの日は、友達とチェス遊びや、プールに行くのを楽しみにしています。わたしのお母さんは今、日本に留学しています。わたしの将来の夢は、医者になることです。お母さんのように、たくさん勉強をして日本に留学して、モンゴルで医者として活躍したいと思っています。

学校が夏休みになると、遊牧民として生活しているおばあさんのところに遊びに行きます。おばあさんのゲルでは、わたしは、朝6時に起床して、牛の世話をしています。朝と晩に乳しぼりをして料理をしたり、牛糞をあつめてストーブの燃料にしたりしています。おばあさんのお手伝いをするのが大好きです。お手伝いは、将来何かの役に立つと思い、自分のために進んでやっています。

(4) 参考資料等

- ・『地球の歩き方2016～2017』ダイヤモンド社 2016年
- ・『国際理解教育—地球市民を育てる授業と構想』大津和子著、国土社、1992年
- ・『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』磯野昌子他著、開発教育協会、2003年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

(1) モンゴルの写真やゲルを見て

- ・モンゴルと日本は似ていないと思っていたけれど、日本と身近なところがあり驚いた。
- ・日本の物がモンゴルにあって、日本は世界に進出していると思った。
- ・モンゴルは親日国だなと思った。
- ・モンゴルのゲルは、移動式で持ち運べることに驚いた。
- ・ゲルは、持ち運びやすいように、できるだけ軽くして木を組み合わせていることを知った。
- ・ゲルは、モンゴルの気候に合っていると思った。

(2) モンゴルの小学生の話や JICA の取り組みを聞いて

- ・自分も何か協力や協同できるのならば、やってみたいと思った。日本だけでなく、他の国も豊かになるようにしたい。
- ・「国際協力」で募金活動などを進んで行うことで、世界の人々の為に役立ちたいと思った。

(3) 世界で働く人のインタビューを聞いて

- ・困っている人を助けたら、自分もうれしくなったと思った。
- ・国際協力をしている人は、いろいろな思いを抱いて働いていると思った。他国と関わっているうちに、仲も良くなって良い関係が作れると思った。
- ・国際協力に参加することによって、その国の人々が喜び、新しい知識・技術を得られるだけでなく、自分自身も成長することができると思った。

(4) モンゴル人のトゥシーさんのお話を聞いて

- ・モンゴルの田舎と都市部の違いがあって、空気が汚染されているところもあることに気が付いた。
- ・トゥシーさんが、世界の勉強できない子供を助けたいという思いを持っているのがすごいと思った。
- ・モンゴルの田舎の子供の貧困が改善されればよいと思った。
- ・モンゴルと日本の関係を深めることで、モンゴルの発展につながると思った。

(5) 保護者の方の感想

- ・JICA の方のお話を聞いて、取り組みに関心した。海外でボランティアすることは、その場限りの助けではなく、その後にその国の人達が自分達の力でできるようにすることの素晴らしさを知った。
- ・国際協力で子どもたちに夢や希望を与え、素晴らしい活動をしていることを知った。
- ・身近なところに、国際協力ができるきっかけはたくさんあると気付いて欲しい。
- ・困っている人を助ける時、本当に必要なものを考え、その力になれるような大人になって欲しい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

教師海外研修への参加前には、日本とモンゴルの関係性についての知識は浅く、どんな授業展開をすれば国際理解につながるのか分からなかった。研修中では、モンゴルの厳しい環境の中、働く人々の思いや願いに触れることができた。日本に住んでいるモンゴル人や協力隊の方にも話を聞くことができた。日本が一方向的に支援をしているのではなく、日本もモンゴルも互いに助け合うことが国際協力であることを児童に知って欲しいと考えるようになった。

○本単元における PDCA サイクル

段階	項目
P 計画	○児童の事前調査から児童の実態をつかみ、どのような学習計画を立てればよいか、他教科や行事（留学生との交流会や外国語活動）との関連を考えながら学年で取り組める国際理解の単元を年間計画に入れた。小学校学習指導要領をもとに、授業のねらいを設定した。
D 実施	○モンゴルに行く前に、総合的な学習の時間で世界の国についての調べ学習を行った。留学生との交流会では、日本の文化や遊びを紹介した。 ○授業の導入では、写真を使ったり、モンゴルで購入したモンゴル土産に触ったりした。グループ活動を増やし、友達と意見を言い合いながら考えられるようにした。
C 検証	○最初にモンゴルと日本の共通点について扱うことで、児童にモンゴルと日本は近い国であることに関心を持たせることができた。また、モンゴルでインタビューした資料や協力隊の経験をお話していただくことで、それぞれの人たちが支援している国の人、日本のために働いていることを知ることができた。最終的に、自分のためにも活動していることに気付き、今を生きる自分のキャリアについて考えることができた。
A 改善	○多くの情報を得たが、どの資料が児童に効果的に活用できるのか考えていきたい。 ○児童の実態に合わせて、モンゴルと日本の共通点を重点的に学習してきたが、相違点やモンゴルが抱える課題についてはより考えていかなければならない。 ○モンゴルに行ったことのない人でも、手軽に国際理解の授業を行えるように、資料作りをしていきたい。

10 教師海外研修に参加して

本研修を通して、日本やモンゴルで様々な人々と出会い、話を伺うことができた。世界に生きる一人として、それぞれの立場で考えを持ち、将来に生きるよう活躍している姿に感動した。海外に関心が低い日本の子供たちに紹介し、世界に目を向けるきっかけになればよいという思いを持った。

日本の子供たちが世界に目を向けられるよう、まず私が見てきたモンゴルの人たちの親日感情や日本への信頼感を紹介し、興味を持たせたいと考えた。児童は、日本と似ていることにとても驚き、モンゴルを身近に感じたようだった。そして、モンゴルで活躍する人達は、言葉や文化の壁がある中での苦労

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

や困難を前向きに捉えて、自信を持って頑張っていることを紹介した。児童は、支援している国や人だけでなく、自国のため、自分自身の幸せにもつながることに気づき、驚いたようである。今後、子供たちが、どんな困難な物事でも前向きに捉えて、世界の人と進んでコミュニケーションをとって欲しいと願う。

また、「国際協力」とは何かを改めて考える貴重な機会になった。今後も児童が興味を持って世界に目を向けられるよう、先生方と協力しながら授業実践をしていきたいと思う。